Photographic Society of

Zone System

ゾーン・システム研究会会報　Web 公開版

発行日：2013.7

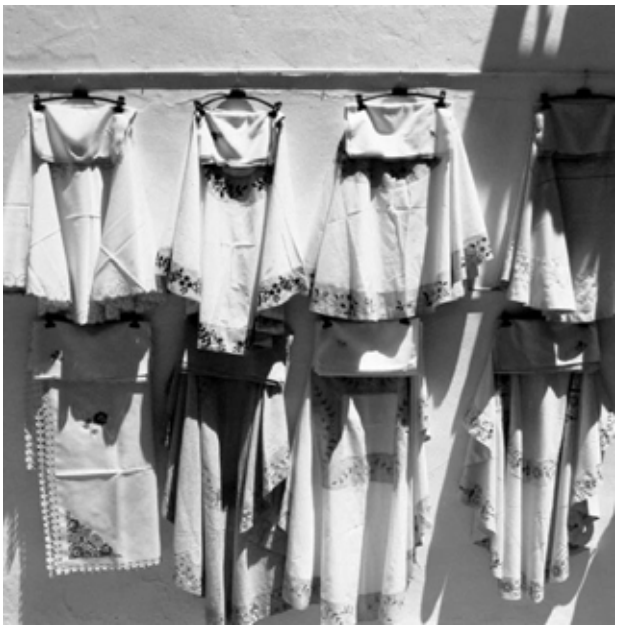
発行者：中島秀雄

事務局：畑文夫

NO.54

CONTENTS

・ 「キャパ」の写真を巡って･･･その 1
・ いわき撮影会
・ 中島秀雄写真展 「光りへの眼差し」 関連情報
・ 「ザ･写真館」 中島代表記事
・ インフォメーション



「キャパ」の写真を巡って･･･その１

中島秀雄

写真が誕生して今年で 174 年になる。これまでに私達はメディアを通して様々な写真を見て来た。それらの写真の中には年月を越えて何度も見たくなる写真もあれば、二度と見たくない写真もある。しかし、何度も見ることになった写真もある。

フォトジャーナリズムの世界で、これ程長きに渡って繰り返し見ることになる写真がほかにあるだろうか。1936 年、スペインの内戦を撮ったロバート･キャパの「崩れ落ちる兵士」の写真だ。反乱軍と戦う国民戦線の兵士が丘を下る途中狙撃兵に撃たれ、崩れ落ちる瞬間を捉えた写真だ。弾丸の反動で兵士はやや後ろに傾き、腰を落とし、兵士にとって自らの身を守る大切な銃を手放そうとする瞬間を捉えている。

ロバート・キャパは、1913 年、ユダヤ系のハンガリー人として生まれ、本名はエンドレ・フリードマン。若い頃、政治活動で警察に逮捕されたこともある。やがてハンガリーに未来はないとドイツに向かい、ジャーナリズムを学ぶうちに写真に興味を持ち、写真家として進むことを決意する。そして、あるきっかけでフォト・エージェンシーの暗室助手として働くようになり、写真家の足掛かりになるようなものを得るが、ヒットラーの登場でフランスに渡る。しかし、仕事はなく貧しい生活を送るが、ドイツ時代に買ったライカで写真を撮ることだけはわすれなかった。やがて偶然にも一人の女性と出会うことになる。名前は、ゲルダ・タロウ。小柄だが機転の利く美しい女性だった。キャパの名は、このゲルダの発案で、アメリカ人が撮った写真とした方が高く売れるだろうと、その後、ロバート・キャパと名乗るようになった。二人はどこへ行くにも一緒で、ゲルダはローライフレックス、キャパはライカを持ち、やがてスペインで*内戦が勃発したことを知り、スペイン語の出来るゲルダと共にスペインに赴くことになる。

*選挙で選ばれた人民戦線とフランコ将軍との戦い

現在も世界のいたるところで戦争や紛争が絶えない。それらの現場へ飛び込むジャーナリスト、写真家はいったいどのくらいいるのだろうか。フォトジャーナリストならあらゆる現場、あらゆる事件をその時間と空間における事象の決定的瞬間を撮りたいと望むのは当然のことだろう。その結果、私達は彼らが撮影した膨大な量のほんの一部を日々マスコミを通して目にすることになる。負傷した市民や兵士を捕らえた写真、自爆テロでうつぶせになった市民のいたたましい光景は枚挙にいとまがない。しかし、写真家が捉え現況を伝える多くの写真があるにも拘わらず、特にキャパの「崩れ落ちる兵士」の写真が今日まで多くの人達の注目の的になり、報道写真家達の目標にもなってきた。それにはそれなりの理由があるはずだ。それはどんなものなのだろう。

1936 年当時、この写真がヴュ誌や雑誌ライフに載ったことで、国民の勇気ある行動として各国から義勇兵がスペインに集まるきっかけとなった。「即死なのか、銃弾はどこを貫いたのか、頭か、胸か、戦争は怖い、死は恐ろしい、場所は、

兵士の家族は、歳は、名前は、死を覚悟して飛び出したのか、周囲の兵士は防ぐことは出来なかったのか、敵はどこだ、カメラマンは撃たれなかったのか、どんなカメラで撮ったのか・・・・」写真を見た当時の人達の思いは様々だったに違いない。それほどインパクトのある写真だった。

現在、カメラの機能は当時に比べはるかに発達し、撮影は容易になっている。しかし、今日までキャパのような死の決定的瞬間を捉えた写真は見たことがない。それは、戦場という極限状況のなかで、自らの死を覚悟しながら事の瞬間を捉えることがどれほど難しいかと言うことだろう。敵がどこにいるかも分からずカメラを持って身をのり出せば自分が撃たれるかもしれない。また、兵士の誰が撃たれるかなどまったく分からないだろう。そういう意味で、キャパの写真は事の決定的瞬間を捉えた第一級の写真であり、狙撃された兵士の死の瞬間を捉えたあまりにも完璧な写真として、時代を越えて語り続け、見るに値する写真だったと言えるのだろう。

しかし、キャパは、この写真についてはほとんど語ることがなかった。「場所はどこか、兵士の名前は、その時の状況は・・・」。キャパは、後にいくつかの通信社とインタビューに答えているが、話すたびにその内容は異なっていた。その上、写真家にとって大事なネガを紛失してしまっていたこともあり「崩れ落ちる兵士」の写真はその後、長い間、謎を孕みながら公表されてきた。

今年の 2 月、NHK スペシャル「“戦場” 写真 最大の謎に挑む」と称した番組が放映された。これは、戦争報道の中で謎とされてきたキャパの写真“崩れ落ちる兵士”について、強い興味を持った作家・沢木耕太郎氏の長年の取材を中心に、映像と CG を駆使して真実にたどり着こうという内容。NHK スタッフと沢木氏がキャパの撮影地エスペホの丘を訪ね、現地の人達のインタビュー、残されたキャパの写真などからカメラの位置、カメラの種類、撮影角度、兵士の動き、時間などが割り出され、その結果、“崩れ落ちる兵士”の写真は、キャパが撮影したとするには多くの矛盾があることが分かってきた。

＊参考資料: 沢木耕太郎著「キャパの十字架」
ライフ写真講座
ロバート・キャパ展図録

いわき撮影会

畑　文夫

3 月 17 日、福島県いわき市のギャラリーコールピットで開催中の中島代表個展「光りへのまなざし」の見学と撮影会が行われた。

いわき市は昭和 40 年代まで常磐炭鉱の町として栄えた工業都市で、ギャラリーも炭鉱に関係のあった会社が運営しているという。レンタル暗室の管理はヒットオンの林氏が担当している。

午前 10 時、いわき駅から歩いて数分のギャラリーに集合。今回の参加は、宮内、鈴木、川北、畑、およびゾーンシステムワークショップの受講者から長谷川氏、菅野氏の２人、計６名となった。

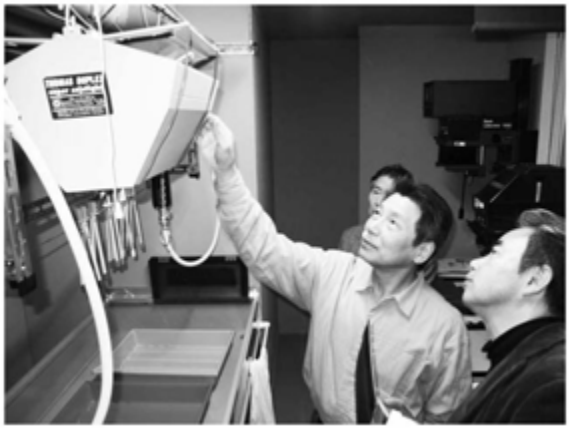
中島代表の運転するワゴン車に全員が乗って出発。まず「石炭・化石館」で、青空をバックに独特な形の建物を撮影。中島代表は構図、フィルターの使い方から露出まで、全員にきめ細かい指導をされる。参加者の機材は、ブローニーが３名、４×５が１名、そして８×１０が２名とバラエティーに富んでいる。

次は建物内に再現された炭鉱での撮影。時々一

般の見学者は通るものの、ほとんど貸し切り状態での撮影となった。この石炭・化石館は、初期の採掘方法から近代の採掘までがジオラマとなっている。最後のジオラマは、抗内事故を想定の酸素マスクをつけた救助隊になっていて、あまりのリアルさにカメラを向けた。我々は、博物館のジオラマを撮った写真家の作品を知っていたこともあり、真似てみた。

次は小名浜の水族館「アクアマリン」へ。館内には入らず飛行機の翼を髣髴とさせるテントを撮る。中島代表からは「翼のイメージを表現するように」との指導が飛ぶ。白く細長いテント屋根は、ライト兄弟が飛ばしたフリーフライヤーの翼に似ていると気付き、翼のイメージで撮ることにした。

全員のペースが中々そろわず、２時を過ぎて時間も押してきたので、近くの観光物産センターで



昼食。

近くの造船所では船とクレーンを狙う。風が強くて冠布も飛ばされそうであった。ここ小名浜造船所も震災で被害を受けたと地元の人から聞いていた。確かに現場は造船どころか、被災した船が修理を待つ溜まり場と化していた。真っ赤な消防艇、青色の小型船、白いヨットが強い光を受け水に反射し、さながら油絵を見るような光景だった。しかし、このように混み入った被写体は、白黒写真の場合シャープに撮らない限り魅力ある写真にはならない。

広大な三崎公園にある番所（ばんどころ）灯台で撮影。iPad で撮影した画像を見ながら中島代表が説明するという、新たな指導方法？も開発された。ポラロイドがなくなってしまい、具体的なイメージを伝えにくくなってしまった。iPad は、その役割を担う道具かもしれない。研究会で買いましょう?

岬に立つ灯台には、いつも引き付けられる。しかし、今回手前の入り口にバリアが張られ、立ち入り禁止になっている。我々は、先端まで行くのをあきらめ、林の途中から輝く灯台を眺めた。

中島代表の予定ポイントは全てを回れなかったが、4 時も過ぎたのでこれにて終了、記念写真を撮る。

５時にはギャラリーに戻り、一時間ほど中島代表の自作解説と作品創りのお話しを聞く。事前にイメージを練り、絵コンテを描くこと、また一方で予定したとおりの撮影が出来ないときは身近

な素材の美を見つけて撮ることなど、全員が参考になった。

我々は、あらゆる被写体に美しさを見出すための技法を備えている。だから最初から対象を限定しすぎない方がいい。テーマを最初に聞く人もいるけれど、いわきに行って砂漠や動物を撮ることは的外れ。海、漁港、テーマパーク、灯台、石炭など、そこに美しさを追求することがテーマと言える。

最後に、コールピットのレンタル暗室を林氏の案内で見学した。地元の写真文化に貢献するため、低廉な料金設定になっているということだった。

今回、いわき市の美術館、ギャラリー等で多くの写真を見ることになり、いわき市がアマチュア写真の盛んな所だと知った。しかし、カラー写真がほとんどで、今後、地元の写真愛好家がモノク写真に興味を持ってくれるためにはひとえにギャラリー活動に掛かっている。

今回は撮影会周知の期間が一週間しかなかったため、参加がぎりぎりまで変更になる方もあったのが残念だった。しかし、中島代表は事前にロケハンをして撮影ポイントや狙いを決め、当日はご自分では撮らずに撮影指導に専念された。これは参加者全員に大好評で、有意義な撮影会であった。

左から　川北、菅野※、鈴木、宮内、中島先生、長谷川※、畑
（※2013 年ワークショップ受講者）

中島秀雄写真展 「光りへの眼差し」関連情報

［いわき日報記事］

19日まで中島さんの写真展

「コールピット」ゾーンシステム駆使した20点

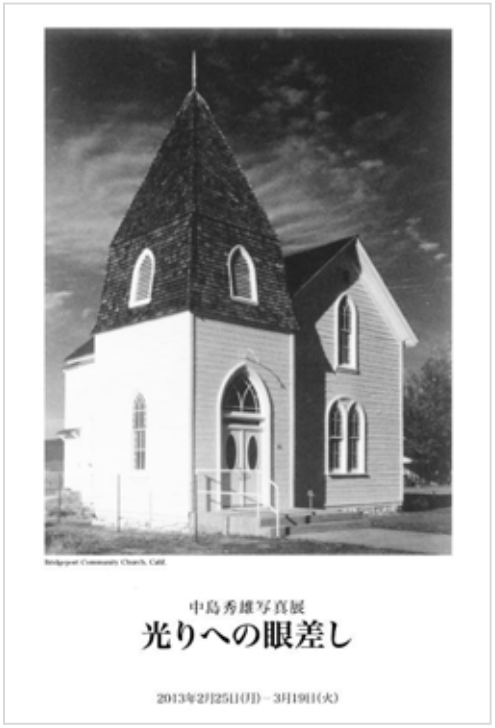
写真家・中島秀雄さんの写真展「光りへの眼（まな）差し」が19日まで、平字紺屋町45、紺屋町ビル3階のギャラリーコール・ピットで開かれている。

中島さんは、米の写真家アンセル・アダムスが考案した撮影や現像、焼き付けまでの一貫した写真技法のゾーンシステムを研究、会場にはゾーンシステムを駆使して仕上げた約20点が展示されている。丸い大きな石のある風景を撮った「グラビティストーン」は石の重さや質感までを表現、「引き潮」では岩場の潮の流れを力強く流れる波の動きで表している。

中島さんは神奈川県出身で、東京写真大（現東京工芸大）を卒業、1980年代からゾーンシステムの研究を始めた。

同システムは、境目がなくなだらかに変化している被写体の明暗変化を、10段階のトーン（10ゾーン）に置き換え、つぶれない黒や飛ばない白を追究しながら作品を制作する写真技法。中島さんはゾーンシステム研究会を立ち上げ代表を務めているほか、全国各地で同システムの講座を開講している。

同ギャラリーの開館時間は午前9時半から午後6時まで、毎週水曜休館。



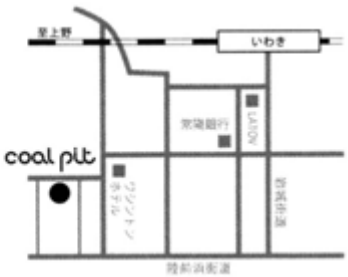
[DM]

[いわき高校写真部生徒の訪問]

ギャラリー　コールピット

開館時間 9:30－18:00 / 休館日 毎週水曜日

〒970-8026 福島県いわき市平字紺屋町45紺屋町ビル3階
TEL:0246-38-3152　FAX:0246-38-3153
E-mail info@coal-pit.com
URL http://coal-pit.com
企画：一般財団法人　戸部記念財団



「ザ・写真館」 中島代表記事　(写真館協会会報 vol.79)

info@rt　このコーナーでは、写真、美術、映画、音楽、文学など幅広くアート情報をお伝えします。

中島秀雄氏

作者略歴　中島 秀雄（なかじま ひでお）

- 1968年　東京写真大学(現:東京工芸大学)卒業
  写真家・細江英公氏の助手となる
- 1972年　細江英公オリジナルプリント展・プリント担当
- 1975年　日本工学院専門学校芸術学部映像科・講師
- 1977年　細江スタジオから独立
- 1978年　写真集"藤田昭子の原風景"出版(筑摩書房)
- 1980年　本格的にゾーンシステムの研究
- 1986年　アメリカ・バモント州"ゾーンVIワークショップ"に参加
- 1987年　写真集"藤田昭子火の光景"出版　(パルコ出版)
- 1991年　ヨセミテ国立公園撮影
- 1992年　個展"ナチュラル・ランドスケープ"(Pgiギャラリー)
- 1994年　写真集 藤田昭子" 陶 "出版 (京都書院)
  ゾーンシステム研究会設立・代表
- 1995年　個展"自然の光景" (ホテル・ハットウォールデン)
- 1996年　個展"River" (ギャラリー・オリーブ)
- 1999年　藤田昭子作品展・写真展参加　(横浜市民ギャラリー)
- 2000年　個展"ストレンジ オブ ライト" (ギャラリーオリーブ)、ヨセミテ撮影会
- 2001年　個展"光りへの観照"&レクチャー (東京工芸大学　写大ギャラリー)
- 2002年　個展"プレビジュアライズ " (東京写真文化館)、ヨセミテ撮影会
- 2003年　グループ展"ワークショップ終了展" (東京写真文化館)
  個展"Ghost Town, Bodie" (アートプラニング青山)
  個展"光りへのまなざし"& レクチャー (ポートレートギャラリー)
- 2004年　個展"Ghost Town, Bodie"& レクチャー (ギャラリーイシス 京都)
  京都造形芸術大学通信講座講師 (京都)
- 2005年　ゾーンシステム研究会"光への探求"&レクチャー (ギャラリー イシス 京都)
- 2006年　ヨセミテ撮影会
- 2007年　ゾーンシステム・ワークショップ　(ヒットオン) 以後毎年、ヨセミテ撮影会
- 2008年　Gallery ims　二人展(取手)
  中島秀雄・春日広隆 二人展　& レクチャー　(ギャラリー円月)
- 2009年　個展"光りへのまなざし"(ギャラリー・モーター)
  ゾーンシステム・レクチャー、大阪芸術大学
- 2010年　ゾーンシステム研究会"光への探求"(シリウス 東京)
- 2011年　ゾーンシステム研究会"光への探求" (ギャラリー-コスモス 東京)
  Niiyama's Gallery ゾーンシステム、レクチャー
- 2012年　ゾーンシステム研究会"光への探求"(シリウス東京)
- 2013年　ギャラリー　コールビット "光りへの眼差し"いわき市

ファインプリントへの拘り

写真家のアシスタントになって間もない頃、私は、芝浦にある倉庫の中で4x5インチカメラと格闘していた。それは、コダックの創設者ジョージ・イーストマンがコレクションした作品の図録制作の撮影だった。エドワード・ウェストン、アンセル・アダムス、マイナー・ホワイト、ウィン・バロックといった世界を代表するオリジナルファインプリントで、今まで見たこともないプリントの美しさに大学を出て間もない私は、大変な瞬間に立ち会っている幸運に身の引き締まる思いだった。アダムスやウェストン、ウィン・バロックの写真には、自然風景や日常生活の中に埋もれている究極的な美を追い求める鋭い感性に貫かれている、と感じ、プリント表現の限りない可能性を強く意識した瞬間でもあった。

写真は、科学と化学にアートがつながるメディアであるゆえ、時代のテクノロジーに寄りそって進んできた。しかし、一貫して銀の化学変化による美しさから離れることはなかった。最近のフィルムも印画紙も使わない技法の登場は、従来の写真そのものの存在を曖昧にしている。

銀塩プリントの美しさとは、被写体の美しさ、構成、シャープネス、そして、深い黒、豊かなハーフトーン、輝くようなハイライトから成っている。そこには、他の映像メディアが成しえなかった銀塩写真の中だけで成立する独特の美学が備わり、永遠の美を閉じ込めてくれる優れたメディアであることに、これからも変わることはないだろう。

ファインプリント技法

適正ネガ作りが結果としてファインプリントにつながる。そのための技法として、私は、アンセル・アダムスが提唱したゾーンシステムを取り入れている。ゾーンシステムとは、風景など被写体の濃淡や明暗の変化を、印画紙に現わせる10のゾーンに置き換えるという発想である。そのためには、自分が使うカメラ、フィルム、露出計、フィルム現像、プリント、引き伸ばし機に至るすべての機材、感材の特性を知ることからスタートする。フィルムの感度や印画紙の特性を見つけることは、適正露出につながり、ファインプリントのネガ作りに欠かせない。私は、引伸し機に冷光源を使い、スタービライザー付きタイマーを使って光量ムラを防いでいる。印画紙は、マルチグレードのバライタ紙。現像液は、デクトールを使い、コントラストの調整には、フィルターやVCヘッドを使っている。私は、定着液の背後にアクリルの板を立てかけ、テストプリントや本プリントを定着液から取り出して張りつけ、400lux程度の照明で確認するようにしている。最初のプリントには何も手を加えずストレートにプリントして何度も眺める。コンタクトプリントと照合しながらコントロール手順をプリントレシピに書き入れ、最終プリントはレシピに沿って進めて行く。そして、仕事場、玄関、居間の壁には、額装された作品が他の写真家の作品と共に展示して、常にベストプリントが眺められる環境を作っておくことが大切だと思っている。

©中島秀雄

ゾーンシステム研究会 代表　中島秀雄
http://hw001.spaaqs.ne.jp/zonesystem/

中島秀雄 「光りへの眼差し」

2013年2月25日～3月19日
ギャラリー・コールピット（福島県）

Ghost town, Bodie,Calif.　©中島秀雄

グラビティー ストーン　©中島秀雄

"Lily"2009　©中島秀雄

【トピックス 】

[ゾーンシステムワークショップ開催]

2013 年 3 月～5 月、中島代表によるゾーンシステムワークショップが開かれた。
（プロラボ「ヒットオン」主催で全 6 回の講義）
非常に熱心な人が多く、受講者のうち数人から研究会に入会希望がありそうです。

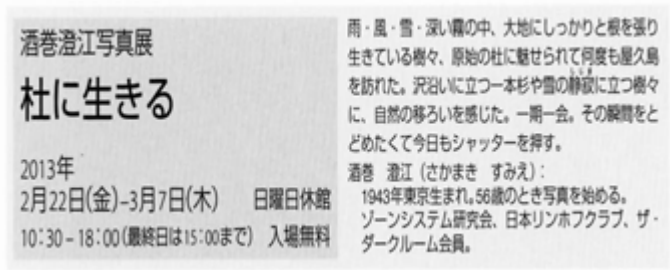
[清里撮影会]

清里にて冬の撮影会が行われました。

・日時：2013 年 2 月 16 日（土）、17 日（日）
・参加者：中島代表、金子、穴澤、川北、松本、皆川
・会員の金子さん企画による、雪景色の清里を満喫した撮影会となりました。天気にも恵まれ、素晴らしい作品が完成したようです。

[酒巻さん写真展開催]

2013 年 2 月 22 日（金）～3 月 7 日(木)、会員の酒巻さんが写真展を開催しました。
屋久島をモノクローム大型インクジェットプリントで再現したもので、大変迫力のある展示会でした。


酒巻澄江写真展
杜に生きる
2013年
2月22日(金)-3月7日(木) 日曜日休館
10:30-18:00(最終日は15:00まで) 入場無料

雨・風・雪・深い霧の中、大地にしっかりと根を張り生きている樹々、原始の杜に魅せられて何度も屋久島を訪れた。沢沿いに立つ一本杉や雪の静寂に立つ樹々に、自然の移ろいを感じた。一期一会。その瞬間をとどめたくて今日もシャッターを押す。
酒巻 澄江（さかまき すみえ）：
1943年東京生まれ。56歳のとき写真を始める。
ゾーンシステム研究会、日本リンホフクラブ、ザ・ダークルーム会員。

[ハッセルブラッド修理業者]

会員の佐野さんより、ハッセルブラッド修理に関して、以下業者の紹介がありました。

■会社名：ハツミ・カメラ・サービス（旧：ワタナベ・カメラ・サービス）
■住所・連絡先：〒104-0061 中央区銀座 1-4-9（第一田村ビル 8Ｆ）
TEL:03-3561-8666　FAX:03-3561-8667

Information

■営業時間 : 10:00～18:00（土曜日は 17:00 まで）
（祝日、日曜日休み）。
■主な修理対象メーカ: : ハッセル、リンホフ（他メーカ要相談）
■ハッセル製品修理認定店
■今回御願いした修理
・故障内容 : ハッセル 500C/M のマガジン(フィルム)巻き上げ不具合
・修理内容：ギアストッパ交換、各部に給油、およびテレンプの交換
・修理にかかった日数：７日間
■所感
・丁寧な説明と修理。
・依頼以外のメンテナンスも行ってもらった。
・修理費が幾分安い。

［表紙の作品］
・作者： 松本ひさ子
・タイトル：テキスタイル・スペイン
・フィルム：KODAK T-MAX400 6x6
・レンズ：80mm
・絞り：f22
・シャッター：1/60 秒
・キーゾーン： 布地（Ⅳ-Ⅴ）
・ハイライト： 光沢部分（Ⅶ）
・シャドー： 壁面影（Ⅲ）
・印画紙：REMBRANT V G2